

季刊 連句 第10号

昭和二十年九月一日号



季刊連句 第10号 目次

二十韻の愛称 (南柏雑記 8).....	1
連句の読み方・味わい方 (二)..... 東 明 雅	2
—「木のもとに」の巻—	
牛耳傳 (3)..... 杉 内 徒 司	6
二十韻 巴里祭	東 明 雅 捌..... 8
絶頂の城 付勝練習歌仙	14
二十韻 梅雨の富士	東 明 雅 捌..... 16
沙羅の会 三歌仙	氏 原 正 雄..... 18
連句のなかの季語—連句雑感 (二).....	草 間 時 彦..... 20
深川遺跡めぐり	中 島 啓 世..... 23
第十四回猫蓑会 六歌仙	
まぶしき昼.....中川 哲..... 25	緑 蔭.....原田 千町..... 25
夏めきし風.....富田一青子..... 26	梅 雨 明 け.....上月 淳子..... 26
亀 の 子.....花井喜久子..... 27	夏 蝶.....速水 昌子..... 27
質疑応答.....28	連句会案内..... 29
	雁帛往来..... 29

表 紙 (笥) 宮 崎 龍 火 子

二十韻の愛称
南 柏 雑 記 8

「季刊連句」八号で、新連句「二十韻」の提唱をして、序にその愛称を公募したところ四人の方から合計十五の御提案があった。九号の「雁帛往来」にその詳細が報告されている通りである。四人の方々の御厚志に対し、深く感謝する次第である。

この十五の愛称はすべて心の籠ったすばらしいものであるだけにその中から一つを選ぶことはなかなか困難であるが、二十韻という形式がこれから現代人に愛用される為には、愛称についても多くの人の心からなる賛同が必要である。主宰が勝手に選んでも、多くの方々に愛用されなければ意味はない。それについて、私見をすこし述べさせていただきます。決定的際、あるいは投票の際の参考にしていただきたいと思う。

それにしては、御熱心さには、ほとほと感心してしまった。一人で九つもお考え下さったとは感激の至り

である。しかも、星火とか、冬扇、はたち、山椒、遊、丸子(東海道二十番目の宿名)など、いずれもおもしろいと思う。ただ、ネクター、オード、コントなど外来詞はいかがであろうか。尤もソネットなどという詞もあるけれども。

慶二さんからは Nekomino・Tsukushi・Kashiwa・Koki の四つが提唱され、漢字はおまかせすることであった。もちろんローマ字ではまずいだらうが、漢字でなくとも平仮名でもおもしろいではなからうか。

正江さんの小面は、能楽界で有名な雪の小面、月の小面、花の小面から来た実に優雅な名で、最初は私も飛びついていたが、二十韻の中に必ず雪を入れることが出来るかどうか。雪が入った二十韻を小面と言うならそれはそれで結構で、すばらしいと思う。

連句界最長老の京極先生からいただいた柏手という名も理に叶っている上に、おめでたくよい名と思う。

最後に「おくればせながら二十韻 愛称 一案『雅』(明雅先生の一字をいただき)」というお葉書を、A・C・C最新参と名乗る依田和さんからいただいた。これも含め、右の私見も参照されて、よい愛称が決まることを切望する。

連句の読み方・味わい方(二)

——「木のもとに」の巻——

東明雅

旅人の風かき行く春暮れて
はきも習はぬ太刀の鞆つばたね

曲水 翁

(現代語訳) 暮春のころ、旅人が風のあとを掻きながら旅をしているが、その佩きなれぬ刀の鞆も何か不格好で、間が抜けている。

(付心) 会釈の付け。前句をその旅人の持物であしらっている。

(付味) 前句の風を掻きながら旅をする何かけだるい感じと、佩きなれぬ刀につけた鞆のぶざまな感じが移っている。あるいは、風の暮の感じにも共通するものがあるのではなからうか。

(転じ) 打越はうらかな気分を十二分に表現した叙景の句で、気持のよい句であったが、この句は一転して前句の旅人の鬱陶しい状態と気分をあらわし、打越が花見の会、この句は孤独の旅人、この点にも十分な転じが見られる。

(補説) 鞆は褌肌つばたねの意で、ひきがえるの肌のように疔のある皮を言い、またその皮で作った刀の鞘袋を言うことは、「今時旅行する者、刀・脇差にひきはだの革にて尻鞆を作りてさやにかくるをひきはだと云ふは、ひきはだの尻鞆と

いふを略していふ詞なり」と「貞丈雜記卷十四」に記された通りである。太刀とは腰に吊り下げる太刀で、腰に挿す刀や町人の道中差しの脇差とは違う。だから、この句を文字通りに解すれば、中世以前の武士の旅姿と解すべきだろうが、「日本永代蔵」巻一の五にあるように、町人が道中差しに鞆皮つばたねを付けている例があるし、前句の位から見てもこれは近世町人の旅姿と見た方が妥当であり、その姿を「わざと事々しく、時代がかつて『はきも習はぬ太刀の』と言ったところが俳諧のおかしみなんです」という暉峻説(同氏・芭蕉の俳諧下)に賛成である。

はきも習はぬ太刀の鞆

碩 翁

月待て仮の内裏の司召

(現代語訳) 月明のころを待って、仮の内裏では司召が行なわれたが、官人のはきなれぬ太刀の鞆も物々しい。

(付心) 有心の付。前句に、太刀とあるから内裏を、はきもならはぬというに仮のと応じたもの。猿島内裏の面影付というが、それには限定されないだろう。但し、須磨や吉野の行宮などの面影は否定できない。月の定限である。

(付味) 前句の「はきも習はぬ」の何か借物めいた感じが、「仮の内裏」の語に響いている。

(転じ) 発句以来の駘蕩たる気分が一転して、急に緊迫した気分になって来た。

(補説) 初五の「月待て」は「月待ちて」と読むか、「月待たで」と読むか諸説の分かれるところである。非常の際だから、月を待たずにと解する方がより緊迫感があったという説も一理あるけれども、考えてみればここはまだ表六句のうちであるから、それほど緊迫感は不要であり、且つ、「月待たで」と言えば、折角の表の月が無月の状態となるのも気にかかる。司召と月の関係については山田孝雄博士の説(「続芭蕉俳諧研究」)もあるもので、ここでは「月待ちて」の意に取ることにした。

月待て仮の内裏の司召

碩 水

靱臼つくだらつくる袖かはやわさ

(現代語訳) 月の頃を待って仮の内裏では司召が行なわれ、その内裏に仕える袖人たちが靱臼を作るその早さよ。

(付心) 前句が仮の内裏の司召で、貴族階級のあわたしさを描いているのに対して、付句は内裏に奉仕する袖人の甲斐甲斐しさを描いている。これは七名のうち向付と言われる手法である。また吉野朝行宮などの面影付でもある。

(付味) 「靱ノ字ニ早業ハヒビキナリ」と「秘註俳諧七部集」に言う通り、前句の仮の内裏の何か事の欠けた倉卒さに対して、袖の早業がよく響き合っている。

(転じ) 打越と前句が、ともかくも貴族の世界を描いているのに対して、この句からは袖人という庶民階級の生活を出し、情景、気分、ともに一転している。

(補説) 靱臼は稲の靱を摺って殻を取り去る臼で木造ったものと、竹を編んで泥を充てて作る土臼とがある。露伴の評釈以来土臼説がもっぱら用いられているが、ここでは袖が作るものであるから、もちろん木臼である。木臼の作り方については清水瓢左氏の解説がある。(「はいかい練習第十五号」)

以上で表六句が終った。発句・脇の長閑な景から、第三に風を掻きながら行く旅人に暮春の情を重ね、四句目はその旅人の会釈と穏かに進んで来たが、第五句目に仮の内裏と一転して変化を見せ、折端にはその内裏に仕える庶民の姿を出し、まずは序として上々の表ぶりである。

靱臼つくだらつくる袖かはやわさ

碩 水

鞍置る三歳駒に秋の来て

(現代語訳) 袖山で袖人は大急ぎで靱臼作りに専念し、それを運ぶ鞍を置いた三歳駒は秋を迎えて一層勢いづいている。

(付心) 七名で言う会釈の付けであり、八体で言う時候の付けである。

(付味) 前句の勇み立った袖人の振舞を、三歳駒(生後三年の若い駒、漸く一人前になった盛りの馬)が、高天肥馬の候を迎え颯爽たる姿に移した。響きの付けである。

(転じ) 打越の仮の内裏の世界から完全に転じて、庶民の生活の一端を示している。

(補説) 「鞍置ける馬といへば、農馬駄馬牧の馬にはあらずして、然るべき士の乗用の馬と聞ゆ」という露伴の意

見もあるが、これが乗用の馬ならば、打越の仮内裏の気分に通い、返ることになる。また、前句との位から見ても、こはどどうしても庶民の馬、前句との関係は、あながち糶白と鞍とを結びつけて考えなくとも、忙しく働く柚のそばに、鞍をつけた若駒が嘶いている景を想像すればそれでよいが、荷物を運ぶ鞍である以上、糶白を運ぶものと考えても決して悪くはない。

鞍置る三歳駒に秋の来て
名はさま／＼に降替る雨
碩 翁

(現代語訳) 一口に雨と言っても、時により、降り方により、いろいろ名が変わるが、その秋雨に濡れている三歳駒の姿はいじらしいことだ。

(付心) 天相の付けであり、遁句と言ってよいだろう。

(付味) 前句の「秋の来て」を受けて、「光陰のはやきを云へる」(魚潜「付合考」)「種の観想的気分が通いあっている」。

(転じ) 打越に付けた三歳駒は元氣潑刺たる若駒であったが、この句になると秋の雨にうたれた哀れな姿が目につぶ。気分が賑がで陽気なものから観想的なものに変わった。

(補説) 「鞍置ける三歳駒を、宿駅などの馬次場の様と見て、その荷鞍に初秋の小雨のふりかゝる景色を探って来たのである：中略：その雨の哀れに濡れて、この駒も駅馬場の年月を老い行くのである」と、幼い駒に寄せて、移りかへる世の苦勞の姿を見せたのである。(太田水穂「芭蕉連句の根本解説」という鑑賞も肯綮にあたる。そうなれ

ば、「降替る雨」は秋の雨のみでなく、一年中、春雨・五月雨・夕立・時雨などを含めた雨のそれぞれの趣を言っていると解した方がよいであろう。

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮
名はさま／＼に降替る雨
水 碩

(現代語訳) さまざまに降り替る雨の中、大勢の混浴によって、諏訪の温泉の夕暮時は雑沓している。

(付心) 起情の句。時分の付けでもある。

(付味) 「雨の降かはりたるは夕暮と定め、さま／＼といふに入込とはひびきなり」と晧台「秘註七部集」がいう通り、前句の「さま／＼」に入込の人をもって応じ、前句の観想的余情を受けて、田舎の温泉の賑やかなうちにも一種の佻しい風情を出している。

(補説) 入込は、浴場に男女貴賤の別なく入り混浴するをいう。諏訪は中仙道の一宿で、山中の鄙びた温泉、前句の雨のわびしき情に對して、それに適した場所と時刻を定めた付けである。

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮
中にもせいの高き山伏
水 翁

(現代語訳) 諏訪の温泉の夕暮れ、男女入り乱れている中で、背の高い山伏の姿が一際目についたことであった。

(付心) 其人の付けで入込の中の一人を描いた。

(付味) 諏訪は山国であり、また軍神である諏訪明神の鎮座している所でもあるから、山伏の語が利いている。

(転じ) 打越が人情なし、場の句であり観想がかつたさ

びしい句であったのに対して、これははつきり人情他の句であり、勢がよく、気味悪さどモイモイが感じられる。

(補説) 土芳の「三冊子」にこの句を評して「前句にはまりて付たる句也。其中の事を目に立ていひたる句也」とある。そのことは、「中にも」という語が、全く前句によりかかっていて、独立性に欠けるのを指摘したものである。しかし、「此巻の秀逸なるよし、世々の模範として称美する付句也。能く味わふべし」(錦江「七部通旨」)などのように、古来、高い評価を得ていることも事実である。

それは前句に対する付味の高きとともに、「統芭蕉俳諧研究」にも述べられている通り「せいの高き」という単純な特性をとらえて山伏を活写するとともに、周囲の多くの人間の姿も併せて想像させるところにあり、また、この句がきっぱりとした歯切れのよい表現を取っている点である。「やや平板になつて来たところを俄然、奇峰の聳えるような句をあしらっているとところもつとも注意される」(太田水穂「芭蕉連句の根本解説」)の説も首肯される。

中にもせいの高き山伏
いふ事を唯一方え落しけり
碩 翁

(現代語訳) 山伏たちの寄合の席で、中でも背の高い一人の山伏があくまで自分の議論を押し通してしまふ

(付心) 其人の付け、前句の山伏の性格、行動を描いた他の会釈の付けでもある。

(付味) 「セイノ高キト言ニ、唯一方トハヒビキナリ」(晧台「秘註」)とあるように、一方(いっぽう)という漢

語には勢いがあり、前句と響き合っている。また、前句の山伏のいかにも強情一徹らしい余情を汲んで、それを十分表現し得ている。山伏は強情で頑固なものと相場がきまっていたので、この句は一座の笑いを誘ったことであろう。

いふ事を唯一方え落しけり
ほそき筋より恋つのりつつ
水 碩

(現代語訳) ふとしたかきりそのの事から恋心がますます慕って、すべての話をその方へ持って行くようになった。

(付心) 前句の人の言動の理由を述べている形であるから、其人の付。これは会釈ではなく有心の付けである。一句としては形の上からは自の句であるが、前句と結んで女性の一般的傾向を述べたような形であり、それを心配し、意見する人の存在も言外に感じられる。

(付味) 打越と付いた前句は山伏であるが、その前句にこの付句をすると一転して前句も女性となる。これは「取りなし付」(見立て替へ)の方法で、「是らは『にはひ』の滋味をいたくそこなふ悪手段である」(樋口功「芭蕉講座」)という意見もあるが、これは芭蕉の作品一巻全部を『にはひ』で割り切ろうとする偏見である。むしろ太田水穂氏が「芭蕉連句の根本解説」に説かれた「手づよい陰凄な句境が皮一重を隔て、かういふ色っぽい境に接触して味はれるのは、一つの嶮しきで無ければならない。芭蕉の俳諧にはこのきほどいふ裏合せの句がしばしばあり、この着かず離れずの危ふい機会(いしあひ)或は呼吸というやうなものは芭蕉俳諧の独特の味である」という意見に賛意を表する。

五

連句は三句の亘りを考慮しつつ、前句を支点として付句を案ずる。付句によって思いがけない方向へ展開してゆくのが連句の楽しみの一つだが、牛耳はある腹案をもって連衆をその方向へリードしてゆく。その流れが意図する線から逸れると、素早く力強い句を付けて強引に腹案に引き戻す。

牛耳は小説に必要な構成力を連句に取り入れられた。意図的なものを連句に持ち込んだのは牛耳が初めてであり、それが破綻を示さず成功したのは、根津芦丈から学んだ伝統的な俳諧知識をこなしていたからだろう。

昨今詩人、作家間にも連句実作に手を染める者がふえ、その作品がジャーナリズムののっている。それらの人々が感性だけを頼りに付けるのとは違って牛耳連句は蕉風であってあぶなげがなかった。

牛耳のこの試みがどのグループでも受け入れられていたわけではない。当時は実作者の数が少なかったし、古い考えの人が多かったから、牛耳の試みが実現した方が少な

った。却って遠方の新しきのわかる連衆に支持された。根津芦丈に育成された信大連句会は芦丈の没後(昭和四十三年二月)やや停滞気味の時代があった。

芦丈三回忌追善のため編まれた「苧日記」(昭和四十五年九月刊)の上梓を機に、信大連句会衆は牛耳と初めて顔を合わせ、牛耳の真価はたちまち評価されたのである。

信大連句会の主要作品集を繕くと牛耳の影響を如何に強く亨けたかがよくわかる。

即ち、信大連句会の次の三書にはどれも牛耳歌仙と牛耳讚美の文章がのせられている。

- 東 明雅『夏の日』(昭和47・9刊)
- 高橋玄一郎『落落鈔』(昭和51・10刊)
- 小出きよみ『花野』(昭和53・12刊)

六

牛耳は晩年に牛耳プランを試みて成功したよき弟子どもとめぐり合った。まったくの初心者グループに八ヶ月間続けて牛耳調の第三を出されて指導をされた。

幸福にも牛耳師の補佐役として手伝わせて頂いた私は、

『摩天楼』に収録されているそれらの「第三」を読み返すと、その席上でおぼえた興奮が再び甦ってくるのを感じる。それらの「第三」とは次のような句だ。

- 日ざしよし (昭和46・11・7)
- 月今宵客鮫鱈をもたらして
- 比庵の書 (同 12・5)
- 民芸の草染め袖機上げて
- 新春和楽 (同 47・1・9)
- 凍陽を辛夷の苔ちりばめて
- 梅探る (同 2・5)
- ジェット機の席あたたかく出迎へて
- 班雪 (同 3・5)
- 雛納め祖父にこやかに手を貸して
- 夜の桜 (同 4・9)
- 弥生尽無為を愉しみ机に倚りて
- 母の日 (同 5・14)
- 風薫る黄金と緑に詩ありて
- 梅雨前線 (同 6・11)
- 星涼しテラスに客を誘ひて

構成力を示す付句は略すが、万事こんな調子だったから、この初心者グループの作品は忽ち牛耳調に仕上がってゆき、連句のとりこになってしまった。

牛耳の没後、この連衆の一人「わだとしお」は、俳諧雑

誌『杏花村』を五十二年一月から刊行した。『杏花村』は六十年四月、百号を以て終刊したが、月刊連句雑誌としては戦後唯一つのものであり、今後も当分あらわれる見込みがない事を思えば、その起爆剤となった牛耳連句の凄さの一端がわかるであろう。

七

牛耳は芭蕉のよみ方にも作家的な目をもって見た。

西鶴が住吉神社の矢数興行で二万三千五百句に華々しい成功を収め、其角が立会役になっていたニュースを野ざらし紀行中に耳にした芭蕉は、母の死にも会い、また一の弟子其角にも裏切られたと思ひ、切破つまった気持で名古屋衆と巻いたからこそ「冬の日」五歌仙が新境地を展いたのだと、牛耳は蕉風開眼の時代的背景を説く。

芭蕉学者によれば、こういう説はないそうだが、その大矢数が貞享元年六月五日の興行、「野ざらしを心に」深川を出発したのが貞享元年八月であり、「冬の日」が同じ年の十月から十一月までの名古屋滞在期間の俳諧であること考え合わせると興味ある見方ではあり、いつかは学界の定説になるかも知れないよ、とある浅酌の宵に打興じられていたのも懐しく思い出される。

二十韻

巴里祭

東 明雅 捌

長雨の朝よりあがり巴里祭

赤白青と縞の日覆

うなる髪童よちよちあゆみ出て

しゃべりながらに眠気催す

欄干の龍舞ひ登る月の天

秋惜しむ身を訪ふ人もなし

この里は婆芸者と稔り田と

一見チベット風の横顔

新発意ら文句あつたら言ってみろ

まとはりつきし子豚親豚

恒彦 時彦 正江 鱒

裕子

恒 時 江 鱒 子

表(四句)

明雅 発句をどうぞお出し下さい。時彦先生には脇をつけて頂きますので皆さんどうぞ。

長雨の朝よりあがりバリー祭
梧桐に忽とわきたる梅雨の蝶
今朝の空はつきり梅雨の明けにける
江戸切子盃に充たすや巴里祭

明雅 ご主人が遅んで下さい。

時彦 それでは「長雨の」をいただきます。

長雨の朝よりあがり巴里祭

恒彦

明雅 そういえば今日は巴里祭でした。やられたというところで。バリー祭は漢字のほうがよろしいですね。

時彦 次も夏、三夏。亭主として付けさせていただきます。これでいかがでしょう。

赤白青と縞の日覆

時彦

明雅 トリコロールですな。夏三句はちょっとくどいので、次は雑でお願いします。止めはなるべく、て、にて、らん止めどうぞ。そして人情を入れて下さい。

恒彦 この機会に、正調二十韻を教わりたく思います。前の二句は人情なしでしたね。

うなる髪童よちよちあゆみ出て

ハイヒール脱いで乗りこむ渡し船

フライドポテト袋はかほか

門限と関係なしに身をゆだね

軍手のままで撫でてやる賢

貫之の千鳥月夜と申すべく

八十路の炬炬燵うたた寝

箔入りの箔がゆらりと酒瓶に

笑ひ初めたる三輪の神山

夢の中無銭旅行で浴びる花

耳に響くは春蟬の唄

恒 子 鱒 時 同 江 江 鱒 明 子 雅

昭和六十年七月十四日首尾
於 俳句文学館

連衆

星野恒彦(紹)

草間時彦(庵主)

秋元正江(猫養)

本井 鱒(ザホトトギス)

永方裕子(万董)

バリカンの音が折々こぼれきて
その中の格天井をたしかめて
明雅 三つ頂きましたがうなる髪が転じがきいているので頂きます。この言葉は万葉にあります。

うなる髪童よちよちあゆみ出て

正江

恒彦 どんな髪型ですか。

正江 あのう、聖徳太子の幼い頃のような髪です。

明雅 一巡したので裕子さん、鱒さんどうぞ。

眠気催す句玉の音

猫にもありし武者ぶるひ

いつまで仰ぐ水煙の上

明雅 水煙はお寺ですからいけません。句玉は高尚すぎますし、猫は人情がありません。

鱒 水煙で釈教になるとは厳しいですね。

裕子 病気も駄目ですね。

時彦 病体、旅体は避けるといえますね。

明雅 いや、旅体はいいのです。芭蕉にもありますよ。

「旅人の風かき行く春くれて」「木の下に」の巻の第三)

鱒 もっと俗な音、ソロバンとか思いましたが、日覆で

商店のイメージに重なるのでこれではいかがでしょう。

しゃべりながらに眠気催す

鱒

裏(六句)

明雅 裕子さん月をどうぞ。動物と結びつけても、恋の情でも。植物もまだ出ていません。
裕子 一番苦手です。これはいかがでしょう。上の五文字が出ませんが、何とか塔の龍舞ひ上る月の天。
鯉 日本橋の飾りにあるブロンズのようなのですか。

欄干の龍舞い登る月の天

裕子

菊枕恋の枕として縫ひぬ
虫取りにデートの人夢中なり
この里は婆芸者と稔り田と
明雅 皆さん少し上品すぎますので、婆芸者を頂きます。
時彦 「私たちのことをいつている」といわれやしないかとビクビクしています。(笑)

この里は婆芸者と稔り田と

一見チベット風の横顔

時彦
正江

一同 凄い月がでたなあ。
明雅 前が眠かったからいいでしょう。次は人情を入れて下さい。でないと「しま」になります。

恒彦 「しま」とはなんですか。

明雅 1・2が場。3・4が人情有りで、5・6が場では完全に結構様になります。

恒彦・鯉 なるほど結構ですね。

明雅 さあ一巡が済みましたから、出勝ちです。すっと出ないと、去来抄の「夜すがらいどみたまひ」みたい「いどみたまう」よ。

秋惜む身を訪ふ人もなし

恒彦

時彦 ぐっと古風に持ってきましたね。恋にしますか？
早苗饗の果てたるあとのたかぶりに
菊枕縫ひあげつる恋心

明雅 実権、カメラマンは他で打越し。印鑑は重すぎるし、二つあり、は婆芸者で笑ったので困ります。
時彦 歌仙は一句三分とかいってせかされますが、二十韻のときは充分時間がありますから、捌きは駄目ならビツと破く位なさってもいいではありませんか。
明雅 やり直しです。(約七分経過)さあ楽しみです。けちったる自動写しの写真なり

名残りの表(六句)

チューハイはホテルのメニューにはあらず
ぬくからず膝のたるみしも引は
くちずさむオントドマリギヤキティソハカ
病む夫の重たくなりし病衣更ふ
癪持ちに秘薬媚薬の効めあり
ネクタイにラーメンのしみつけにけり
新発意ら文句あつたら言ってみろ
明雅 こんどはパスしそうですよ。

明雅 丁度半分です。折立ては雑でも冬でもけっこうですし、酒、海、鳥、時局なんでもいいですよ。
ハイヒール脱いで乗りこむ渡し船
病みつつも越山翁は不滅にて
なにやかとてんぶら種を揃へつつ
試験管並びし窓のうすほこり
明雅 ハイヒールをいただきます。

新発意ら文句あつたら言ってみろ

鯉

ハイヒール脱いで乗りこむ渡し船

恒彦

時彦 いいやり句だ。こんなしゃべり言葉を使ったものが一つ位あってもいいですね。

鯉 捌きから句をつつかえされた気持がワツと出て、すつとしました。

明雅 永平寺の問答、庭話、且過話が浮かびます。いいですね。冬は名残の裏で冬の月を出そうと思えますので、折端は雑でいって下さい。こういうのが出ました。

まとはりつきし子豚親猿

ですが、猿よりほかの動物がいいでしょう。

裕子 では、ちょっと豚などでは。

明雅 面白い面白い。こっけいなのが出てよかった。

まとはりつきし子豚親豚

裕子

明雅 新じゃがは夏、じゃがいもは秋ですが、フライドポテト袋ほかほか
裕子

明雅 新じゃがは夏、じゃがいもは秋ですが、フライシ

たのは無季にとりましよう。やっと新らしくなりました。
恒彦 捌きは大きな船を動かすようで、舵をとるのが大変なのですね。

時彦 50万トン級の船の方向を転じるようなものですね
鱒 次は恋でしようか。前の恋は婆芸者でしたので慾求不満が残ります。ちゃんとした恋をしたいですね。(笑)
花嫁が下着洗って騒がる
見事なる臂ぞと敬意表しけり

門限を過ぎてしまへば身もゆだね
牡丹雪玻璃のくちづけ真似てみん
水飲んでばかり幾夜を過したる

明雅 これは面白い。門限をいただきますが、これは大人の発想で、若い人は門限にこだわりますか。

鱒 僕は純情ですから門限にこだわります。(笑)しかし、若い子はこんなふうかも知れませんね。

門限と関係なしに身をゆだね

鱒

明雅 これで新しい恋が出て満足しました。

軍手のままで撫でてやる臂

時彦

鱒 これでは隔靴搔痒じゃないですか。(笑)

明雅 田園風景のようになりましたが、大人の恋になっ
ていいじゃありませんか。次は冬の月です。

時彦 人名がまだですね。無理に出す必要ありません
か？鳥もまだですね。

明雅 今まで少し俗におとしましたので、皆さん責任と
って、たけ高くして下さい。

貫之の千鳥月夜と申すべく

時彦

時彦 どうです。上品でしょう。

明雅 臂から千鳥とは。(笑)「思ひかね妹がり行けば冬
の夜の川風寒み千鳥鳴くなり」(古今集)ですね。

恒彦 守備範囲がひろいですねえ。

明雅 次は少し述べ懐めた句でもよろしいですよ。

八十路の炬炬燵うたた寝

しらじら立つる冬の波の秀

北風吹く島にかかる大橋

和布刈神事をひかへたる磯

明雅 八十路の炬燵をいただきます。

八十路の炬炬燵うたた寝

正江

明雅 これで述懐が出ましたから、無常はいいでしょう。
名残りの裏へ入ります。もう少しですから皆さんがんばっ
て下さい。

名残りの裏(四句)

箔入りの箔がゆらりと酒瓶に

ときもあります。そこで参加するわけです。拳句は裕子さ
んがんばって下さい。さて、前が上品すぎますし、旅が出
ていませのでこれを。

夢の中無銭旅行で浴びる花

明雅

恒彦 特に拳句の特徴はなんですか？

明雅 何でもいいのです。前句についてなくてもいいん
です。発句と気分がつかないこと。同字を使わないこと、
などでしょうか。(質疑応答欄参照)

耳に響くは春蟬の唄

裕子

明雅 これですごくおさまりました。名残りの表から裏
にかけては、特に面白いですね。

恒彦 歌仙と余り変わりませんね。

時彦 今日ゆっくりにしたのでそうかもしれませぬ。
早くやればまた感じが変わります。

明雅 今日、一句ごとに全員揃うまで待ちましたから、
一時半から五時半頃迄、約四時間かけました。

これは、巴里祭の巻となります。いい句をありがとうございました。
ございました。

一同 ありがとうございます。

(文責 式田和子)

笑ひ初めたる三輪の神山

鱒

恒彦 捌きの方は何処で参加なさるのですか。

明雅 たいいてい匂いの花を頂きます。発句と匂いの花の

箔入りの箔がゆらりと酒瓶に

正江

鱒 次は春ですか？

時彦 花前ですから、早春でしょうね。

メーデー帰りどっと連れくる

どの横町も午祭にて

焼野こえ来したかぶり覚ゆ

霞み初めたる三輪の神山

明雅 皆、神様できましたね。霞み初めたるを頂こうと

思いますが、この巻はどうも上品過ぎますからね。

裕子 連歌みたいになってしまいましたね。

鱒 酒で三輪をつけたのですが。

明雅 「笑ひ初めたる」

時彦 俳諧になった。いいですね。

絶頂の城

付勝練習歌仙
東 明 雅
投句締切
10月20日

通草の実供へてありぬ岐神

嘘のキッスが本物となり

親が居て子が居て電話ままならず

十句日

治定 ばりばりと炒るちぎり菫蕪

1 泥棒猫はすきを覗ふ

2 日の丸の出でテレビ終りぬ

3 鳴戸の渦も橋の上から

4 破産宣告出ない給料

5 小雨ごときに傘借りて来る

6 保守革新と金色の票

7 喪服の似合ふ白き首筋

8 玻璃戸の外に非常階段

9 夫にないしょの株価暴落

10 やつとお尻を上げる家猫

11 貧乏ゆすり身に付きし癖

12 梯子はづしてこもる屋根裏

13 ほこりかぶった短波受信機

14 髭抜かれたる木屋町の猫

15 手帖なくせし不覚なりけり

貞子 昌子 妙子

千町 一青子

啓世 遊

東夷 妙子

和子 昌子

美子 力

眞子 麻子 正哲 淳子

16 地図で迎りしロッキーの旅

17 閨秀作家頭痛肩凝

18 火山灰降りつもる家の中まで

19 戻らぬかねに居ても立っても

20 柱時計の音のせはしき

21 慰撫無礼な利子の催促

22 床の間埋めしビデオパソコン

23 顔を窺ひ庇借る猫

24 通りすがりに猫蹴って行く

25 債務者の身の口々に細りて

26 卵をゆてる砂時計立て

みづゑ 杉亭 孝子 隆秀 篤子 彬風 由美子 智子 蓼艸 正雄 瑞枝

打越、前句ともに自他半の恋句である。恋は二句から五句までは続けることができるのだが、まだ裏に入ったばかりの場所だから、恋句はこの位で止めようと考えた方が多かったようだ。私もそれに賛成である。さて、恋句から脱する句はいわゆる「恋離れ」であるが、これには心得がある。「恋離れ」の句は一句としては恋の意はないのだが、前句の恋句とは余情で微妙についていなければならぬ。だから、全く余情の感じられない無関係な句などを急に持つて来るのは、どうもよろしくないのである。

その点、治定の句は、恋人に電話しようとしても妨害があつて自由にならない気持を、自棄気味の調子に載せたおもしろい付けで、その炒られたものが「ちぎり菫蕪」という庶民の食べ物である点も俳味がある。さらに言えば、裏移りが外の風景で、打越は内外不明、前句はどうも家の内付味は蓮の糸のように」という古人の言葉が味わって下さい。13は捻った句である。12とは反対に付心が遠すぎて付味がよくない。14の猫は京都木屋町の由緒ある猫。若い女性に電話もかけられぬもどかしさのほらいせに、罪もない猫の鬚を抜いたというのだろうか。岐神の田園調から都会へと舞台を移す狙いもあったであろう。15もやや12と同じく、電話をかけられない理由を述べているように見える。16はロッキーに居る恋人に電話しようとしてもままならぬ為、地図で迎つて慰めている景か。この句は余情がある。17は樋口一葉の俳句である。この付けは狙いも付味もおもしろく、治定の句に次ぐ傑作である。18は家の内にしぼったのは流石だが、打越との気分の転じが今一步である。19も前句を見立替して、それはそれなりにおもしろいのだが、一巻から恋の情が忽然と消えるのは残念である。20は人間心理のあやに立ち入り、付肌も悪くない。21は例の見立替え、それでも離れて付けている所がよい。22は現代社会の一面か、23は複雑な気分が籠められておもしろい。24は外の景、25は前句を見立替えし、二句併せての恋の情はない。26は治定の句に情景が似ているが、付味と転じて劣る。

次の句は人情自でも他でもよい。雑の長句、題材は何でもよい。酒や四足、時局の句、それに釈教、地名、人名なども出ていない。しかし、それらにとらわれず自由に考えて、おもしろい句を期待しております。

らしいから、これをまた外に飛び出すのはいかかか。その点もこの作者は心得て厨房における人の姿を描いたのは法に叶っているし、打越とちがいが激しい調子で転じ十分である。

1の泥棒猫は俳味は十分だが、「すきを覗ふ」は「すきを窺ふ」と書くべきだろう。前句にすこし言葉の上で付きすぎである。2はよく読めば哀れがあり「日の丸」など意外性があつてよい付けである。3家庭葛藤を鳴門の渦潮に比したのはおもしろいが、外の景になったのが惜しい。4は前句を見立替えている。悪くはないがこれでは前句の余情が生きない。5は句意やや不明、しかも外に出ている。6これも4と同じ。7ははつきり恋を続けている。艶な姿には魅かれないでもないが、こんな風に続けたらきりがない。8はおもしろい場面と気分のある句だが、やはり外が気になった。9も時局性を含んだおもしろい句だが、この句を比べると前句の恋の味が全く失なわれるのが残念である。10ここにも猫が登場、1の泥棒猫にはじまり、この句の家猫、そして14の木屋町の猫、23の庇を借る猫と24の蹴られ猫と五つも猫の句が出て来たのは、おもしろいとともに、何か人間の猫に対する深層心理の一端を示しているものではないか。この句の場合の猫は何かを寓しているのか。お聞きしたいものである。11は打越の気分・表現から転じが十分でない。12は前句の続きを言っている感じがする。電話がままならぬのでやけになって屋根裏に立てこもる。それではあまりに真正直すぎる。「前句と付句の

梅雨の富士

東 明雅 捌

大富士や梅雨中空に碧を刷き
泰山木の白の冴え冴え
刺繡の糸を柀よりひき出して
まつはる子等は童べ唄和す

春山洞
明雅
正江
和子

伝承を採譜しながら月の村
酸橋が欲しくなるやうになり
後れ毛の項に瘦せの目立つ秋
沸き滾るなり庫裡の大釜
三津浜のふたな煮が来て酒をつけ
落化すか家は近いぞ

徒 司
子 洞
江 子
江 子

粉雪の掠める月の径となり
木綿の軍手左右別なく
人ごとのやうに思つてゐたわたし
街で拾つて恋の世渡り
ぢぢばばを騙して持たす金の夢
甲斐の隠し湯万病に佳し

洞 司
子 司
子 司
江 子

行く末の身のふりかたを案じ居り
子猫また来て膝に居眠る
現にも花に上野の鐘響き
日永の駅に啄木の歌碑

洞 司
司 雅
可 雅

昭和六十年六月八日首尾
於 上野公園 韻松亭
連衆 鈴木春山洞
秋元正江
式田和子
杉内徒司

韻松亭連句会のことども

本場に鳴っているんですね。ああ、これがあの有名な上野の鐘ですか。いいものですね。折から巻き進められていた二十韻（私は、ひそかに「雪月花」と呼びならわせ愛好しているが）の「句いの花」に、明雅先生は「現にも花に上野の鐘響き」の御句を詠いあげられたのである。即物即時ながら、思わず、はたと胸打たれ、息を呑む衝撃と感動を覚えた。連句は遊びと言ひ、作句はオールフィクションと肯定されて来た。しかし、その反面、「連句も亦写生」と高揚される立場もあり、我等の祖先が独創の文化財である連句の詩精神の確立をめざす立場もある。

江戸期以来、人口に膾炙して、詩歌の世界では月並化してしまった「花」と「上野の鐘」である。今は概念的に観念的にのみ取り扱つて顧みようともしない素材である。しかし、それでいいのか。「詩」の世界は、絶えず、より新しいものを索めている。より新しいものを求めるあまり、私たちの祖先が遺した素晴らしいものを忘れがちになっている現代人ではなからうか。そんな私たちに、脚下照顧、「美」の真実に根幹に触れることの大切さを示唆して下さったと思った。本物に、本当のものに、現実、耳にし、手に執つて見ることの大切さを今更のように感じたのであった。

昭和六十年六月八日。上野公園内、韻松亭連句会は、東明雅先生と猫蓑連句会の皆様の会であった。私は明雅先生

の御言葉に甘えて四国・松山から、のこのこ上京した。御座敷に案内され、暖い御歓迎を戴き、連衆の皆様は御引き合わせされた。杉内徒司先生とは厚知である。連句の座は、すぐ、百年の友の如く溶けこむことが出来る不思議な雰囲気醸し出す談笑裡に進行した。楽しかった。

「二十韻の真髓を洞君に覚えて帰つて貰おう」と徒司先生が言われる。春山洞は既に、明雅先生の御招きをいただいた時から、そのつもりだった。単なる遊びでなく勉強させていただく心積りで緊張していた。ホームグラウンド（韻松亭がというのでなく）の明雅先生の御捌きの優雅・適確・真剣さを目のあたり拝見して感激した。大宗匠にして馴れがない新鮮さを漂わせた雰囲気は素晴しく、一生に一度の稀有の体験を得させていただいたと思つている。連衆の方々の猫蓑ぶりの付けは、都会的瀟洒さを發揮され、目を瞠る思いがして大変勉強になった。『三津浜のふたな煮が来て酒をつけ 和子』には、あつと驚かされたものだ。座の話題を即妙の付けに変化された俳諧は面白かった。

二十韻を体験して、一句一句の付け合ひの中に確立する、連句独特の詩精神が、歌仙によって昇華された蕉風俳諧と同様の素晴らしさを持つて迫つて来るのを感じた。格に入つて格を知り、格を知つて格を出した連句の世界の「自由」「楽しさ」を体得した。『羽化登仙とは、こんな気持を言うのだからか。』

（芭流朱連句会主宰 鈴木 春山洞）

連句のなかの季語

—連句雑感(二)—

草間時彦

歌仙三十六句のうちに、季の句と、雑の句との割合がどのくらいかを見て行くと、意外にさまざまである。

標準を考えてみると、夏、冬が二句ずつ二度出る。そのうち、一度は月である。秋は、月が二回で計六句。春はウラの花のところまで三句、名残の裏の花で二句、計五句。合計で十九句ということになる。夏と冬とが一句で捨てる場合もあるから、三十六句の半分が季の句と見るのが妥当である。月は三つとも必ず、秋でなければいけないという人もいるが、そうすると、秋が九句登場することになって、秋過剰と言えよう。季の配分のバランスが崩れてしまうのである。

歌仙というものが完成された詩型式であると、しみじみ感じるのは、進むに従って、四季が順次登場して、しかも、

行しはじめ、食べものは傷む。堪え難い暑さが来る。戦前の歳時記でコレラ、赤痢が夏の季語となっていた。コレラを席題として、高浜虚子が

コレラの家を出し人こちへ来りけり 虚子

という句を作った。疫病は日常事だったのである。

秋もそうだ。実りの秋だ。高温多湿の夏が過ぎた喜びの季節だ。

そう考えてくると、春と秋は一日でも長くつづいて欲しい。夏と冬は一日でも早く終って欲しい。そういう願いが日本人の誰にでもあったのである。それが、春秋は三句だが、五句までよい。夏と冬は一句で捨ててもよいという式目になったのではあるまいか。

だから、花につづく春の句のときは、席上に春の気分がみなぎって、いなければならぬし、秋の月のときは、月光が射し入り、さわやかな秋風が席上に吹いている気分でないといけないのである。季の句は季節感がなければいけない。わたくしはそう思っている。

現代連句は季節感が乏しいように思う。それは何故か。いろいろなことが考えられるが、一つには現代俳句の季語の設定にも一因があるように思う。季語が多くなり過ぎてしまったのである。

季語を分類してみよう。

第一級の季語。古典詩歌にも歌われていて、しかも、現代でも季節感のある季語。例えば、雪、月、花、時雨、時鳥、鶯など。こういうのは季語というより、季節と呼んだ

結果としてバランスが保たれているということである。その点、二十韻、半歌仙はまだまだ、季の配分が安定していないようだ。もう暫くの歳月を必要とするであろう。なしら、歌仙という型式は芭蕉以来、三百年の年月を経ているのである。くらべるのが無理というものだ。

夏と冬は一句か二句。春と秋は三句、場合によっては五句まで続けてよいということになっている。このことについて、わたくしはこう思っている。

春と秋には気候もよく、風物も美しく、生活が楽である。食べものも豊かだ。古い季節を見ると、三月尽、九月尽という言葉はあっても、十月尽とか、四月尽とかいう言葉は存在しない。三月尽は旧の三月、つまり、春の終るのを嘆く言葉である。旧三月が終り、四月になると、伝染病が流

方が適切である。重い季節である。しかし、歌仙のうちの季の句が、すべて、こういう季節で占められると、歌仙そのものが古臭くなると思う。要所々々に使って、歌仙そのものを締める働きをさせるべきだろう。

一級に別格がある。それは、古典詩歌では重い役目をしているのだが、現代に生きていない季節である。例えば、硝。秋の季節だ。「雀海中に入って蛤となる」などもそうだ。三十六句のうちで一句ぐらいいは使ってみたい言葉だが、もとより多用をしない方がいい。

第二級の季語は古典には登場しないが、現代に生きていて、しかも、季節としての約束性も強く、季節感も充分にある季語。例えば、向日葵。盛夏の気分が濃厚だし、感じも新しい。まだまだ、数が多いが季語の中心となっているクラスだ。

第三級の季語は、季語として認められたときは第二級だったのだが、その後、季節を喪失しつつある季語。例えばトマト。一年中、八百屋の店頭にある。歳時記では、どの歳時記でも夏になっている。しかし、夏の季節の乏しいこととは否定出来ない。

トマトを添えし肉のひと皿

こういう付句が出た場合、夏の句か、それとも雑の句か。もっとも、夏は一句で捨ててもよいのだから、どちらでもよいとも言える。

しかし、次の場合はどうなるのであろう。
トマトジュースで月の出を待つ

「この句はトマトが夏の季語だから、夏の月です」と作者が言ったとしたら、夏としなければならぬのか。そうでなくて、文音で、だまって送って来たなら、わたくしだったら秋の月として受けるであろう。

咲きし牡丹に月の出を待つ
これだったら、夏の月である。牡丹が一級の季題だからである。

第四級は最初から季感が乏しく、最近の歳時記ブームでなんとなく季語になってしまった季語。例えば魔法臺は冬の季語だとする歳時記がある。連句ばかりでなく、俳句としても、どうかと思う季語。ただし、連句では、雑として使う分には一向に差支えない。

第五級は連句に限って、使うことを避けた方がよい季語。そういう季語が、数は少ないが幾つかある。夜の秋は大正時

代に夏の季語となった。いい季語だ。しかし、連句の場合、夜の秋と使っていると、あとで秋の句を出すのに邪魔になりそうだ。夏蜜柑。これは歳時記によって、夏とされたり、春とされたりしている。夏蜜柑と呼んでも、出荷は三月か四月だから春なのである。避けて通った方がよさそうである。小鳥なども、例えば眼白は春になったり秋になったりしている。

わたくしが言いたいことは、現代連句の作家が、季の句を作る場合、季語の個性、重さなどを充分に見極めてから使って頂きたいということである。歳時記に収めてあるから季語であるというのは安易過ぎる。又、花の座、月の座のあたりは季節感が溢れるようにありたい。歌仙の三十六句のうち半分もの季の句が含まれることの意味を重く見て頂きたいのである。

武翁賞作品募集

武翁賞については、昭和五十九年度は残念ながら該当作品がなかったが、昭和六十年について左記に従って是非授賞に値する清新な作品があらわれるよう、待望するものである。

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由とし、九月十五日までに呈出されたい。

深川遺跡めぐり

——遺跡から伊せ喜へ——

中島啓世

去る七月三日、A・C・C・連句教室の有志は芭蕉記念館に集合、旧新大橋址の碑から芭蕉庵址、安宅幕府御船蔵址、素堂邸址（碑無）要津寺（雪中庵三世の芭蕉師塚）長慶寺（時雨塚）五本松塚（工事中）女木塚、採茶庵址、園女墓、臨川寺等芭蕉関係を巡り、伊せ喜とせうで二十韻を巻き、清澄庭園から隆秀氏の案内で鶴屋南北やその作品の舞台等江戸文学の情緒にひたり雨中には云えみのり多い一日を過ごすことが出来た。

寛文十二年（二十九歳）伊賀上野から江戸に下った芭蕉が、立机して、地位も安定して来た延宝八年（三十七歳）の冬、市中

を離れ門人杉山杉風の生簀の番小屋を改造した深川の草庵に居を移してから、元禄七年五月（五十一歳）西国の旅に出るまでの十四年間、天和二年の大円寺出火の類焼のため、甲州、高山奥州方への流寓や奥の細道等の旅で留守にしたものの十年余を住んだこの深川。地元深川での友人のことを思うと、飲料水にさえ、事欠いた暮しが、どんなにか慰められたことか。先づお船蔵の近くの安宅に住んでいた、山口素堂。芭蕉はその俗脱清澄の心境に深く傾倒し、蕉門の客分として遇していた。彼は再度の庵の新築にも協力し、母堂の喜寿の祝菊見の宴、忘年会と芭蕉や門人を招き飲を尽くし歌仙も巻いた。次は仏頂禪師で鹿島根本寺の二十一世。彼が鹿島神宮と寺領のことで九年間も訴訟のために度々来ていた臨川庵へと芭蕉は参禅して、仏教の奥義を学ぶと共に仏頂の人格にふれた。貞享四年には彼を訪ねて月見かたがた鹿島詣をしていて、そして二年後の奥の細道の途次、黒羽を三里も東の山奥にそれた雲岩寺に和尚の山居跡を訪い参禅の師を偲んで「木塚も庵は破らず夏木立」の句をよみ、人徳をたたえ、思慕をこめたものである。三人目は長慶寺の三

世、松山峯吟師、史邦の芭蕉庵小文庫に「長慶寺の禪師は、亡師（芭蕉）年頃睦び語らはれければ、例の杉風、かの寺に一つの塚を築きて『さらに宗祇のやどりかな』と書きおかれける一僧を壺中に納め此塚のあるじとなせり」とあり、又支考の笈日記にも「師の生前、たのみ申されし寺なり」とある。四人目の友は女木沢桐笑、元禄五年秋には、九月十六日から芭蕉庵に滞在していた酒堂（珍頓）をつれて桐笑宅で次の歌仙を巻いている。（むつちどり）

秋に添うて行かばや末は小松川 芭蕉
雀の集ふ丘の稲むら 桐笑
月くもる鶴の首尾に冬待ちて 酒堂
他にも桐笑との風雅を解する想いの通い合のうのを詠んだ次の句が統猿蓑にのっている。
川上とこの川下や月の友 芭蕉
江戸名所図絵の小名木川、五本松の図に、満月を川にうつして舟遊びをしている芭蕉の一行がかかれています。近くの五間堀には神道と和歌にくわしい曾良も居り薪水の勞を助け、よき友人に恵まれた芭蕉の晩年を偲ぶことが出来る。